

ハリル イブラヒム アブドゥル=マジド 米国出身の元キリスト教徒（上）

:

明:サウジアラビア王国に旅した、いかに神は彼を祝福したか。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 男性](#)

より:ハリル イブラヒム アブドゥル=マジド

日08 Jun 2015

集日 08 Jun 2015



1998年、私は内科医として いていた父と一 にサウジアラビア王国での仕事に参加しました。彼はサウジアラビアで、私は米国にいました。その同じ年にサウジアラビアに出した、ダラン市に滞在し、アル=コバルも しました。そこでは多くのことでとても刺激を受けましたが、アザン（礼 の呼びかけ）を初めて耳にした は、私の中の深い部分の何かが呼び まされた感じがしました。りの店 は一 に 店したものの、店主たちは扉を施すらず礼へ出かけていて、私は「これは一体どういうことだ？」と疑 に思ったものです。ムスリムたちは礼して ってくると、一 にリフレッシュした面持ちでした。私はそれを て考えられました。また、サウジでの身元引受人ムハンマド氏に多くの をしていると、市内の大モスクへ れて行ってくれ、私は 方で 学することになりました。はしたものの、私の目と心は大きく かけられました。それまで私の父を含む 一人として、そこに招待された人はいませんでした。ムハンマド氏は、当 は私自身も づいてい

なかった何かを私の中に 出したのかもしれませんが。彼からは、 クルア ンの英 本ももらいました。その出 で米国に持ち った品物の中でもクルア ンを最も大事なものとして いました。残念ながら、当 はそれを本棚に へのする なる所 本の一 として い、 むことはな いという大きな ちを犯してしまったのです。しかし、 去に全く知る 会のなかった土地 の 明な は残り、私の中に刷り まれました。

数年 、私は妻と2人の息子という自分の新たな家族を えて ってきました。皆、サウジア ラビアでの生活にすぐに溶け みました。私の生活は仕事、家族そしてエクササイズを 中心に回っていました。私が行っていたお祈りといえば、すべて 人的なものであり、 多くとも1日1回だけでした。 解して欲しくはないのですが、当 の私はキリスト教徒で 、キリスト教徒であることに多くは求められません。ただ、大半の人よりは色々へ行 いました。私は たちが礼 の前 で せる仕事への影 を 察していました。心の底ではアッラ が私へ呼びかけているのを感じていましたが、信仰的なムスリムが 山いるリヤドの病 院のモスクのすぐ横で いていたにも わらず、私はそれを していました。私は自らのキ リスト教的理解を固持し、反抗的とも言えるほど人を寄せ付けませんでした。年月は ぎ、礼 への 味は失せ、ただ神との直接的な をまれに保っていただけでした。やがてサ ウジアラビアでの滞在は2001年に わり、私の家族は米国のフロリダ州に 国すること になりました。

米国にいた 、私の家族は教会に通い出しましたが、私自身はもう同じ人物ではありま せんでした。三位一体の概念を理解しようと必死に みたものの、他人に する「人」と なるほどまでには受け入れることができなくなっていました。何かがおかしかったの ですが、具体的に何かおかしいのかは分かりませんでした。よって、私は神に直接 り かけました。かれご自身がすべてを 造したのですから、なぜ か他の人物を通してかれ へ祈りを届けてもらわなければならないのでしょうか？

当 、私の人生には罪が重くのしかかってきていました。それは私自身によるものと、 在の私にとっての元妻からもたらされたものです。私は人生の中で最も意 消沈する 期 にありました。私に通っていた地 への道は く容易なもので、天国への道は狭く渡るの が困 なものです。正直言うと、私は地 へ向かっていたのではなく、地上の地 に生きて

いました。私は常に祈りによって物事のバランスを取り、ときおり嫌々教会に1 ほど出席したものでした。この状 は、ここアル＝コバルにある病院の任 を引き受けることになるまで、数年 きました。

昨年、アル＝コバルにやって来る以前の数年 の い状 が一因となり、23年 いた婚姻 が 焉したことにより、 と悲しみに ちた年でした。あれ程までに落ち むことになるとは思 いもありませんでしたが、神はすべてを持ち去り、私をそれ以上はない底 に れて行きました。私の周 にいる人は、私がいつも沈痛な面持ちで、私の人生も空っぽであることを知っていましたが、日に日に状 は向上してはいました。私は日 の朝のお祈りを欠かさず行い、 繁にバイブルを、 に一度に数 を み通しました。 での 人的な生活も向上しつつあり、それは 婚手 きで米国に らなくてはならなかった期 でも同 でした。米国から 来てしばらくすると、私の上司の一人がイスラ ムについての情 をくれ、私は 迎したものの、それを むどころか目もくれず、それは引き出しの中に直行しました。それにも わらず、上司と私の周 の同僚たちは私から私自身も づいていなかった何かを 出していました。あるとき、スタッフの一人が私にお祈り用の数珠をくれました。私はそれを 日右ポケットの中に入れ、右手でそれを一日中何度も何度も数えていました。それを指で がしていると、最も困 なミ ティングでも冷静さを保ち けることができませんでした。人生は一 一退の状 が いていましたが、生活と仕事は きました。そして去年の1 1月、私は 婚裁判と家族の で米国に一 国しました。良い も い もありましたが、故 の心地よさのようなものは全く感じられませんでしたし、教会にも足を ぶことはありませんでした。

12月の始めにサウジに ってきた 、私は落ち着くことができませんでした。 断を下すのが困 だったため、それを下せずにはいました。それゆえ、私は自分の心と精神に耳を け、リラックスすることを心がけていました。何日にも渡り、多くの人々は私が何かに 心を われていたと 思っていたらしく、私が何を考えているのか不 思 がっていましたが、私は身を くしようと なものを一 ずつ切り てたり、何が返ってくるかは未知数だったものの、 やメッセ ジを り返し送ったりしていました。病院ではモスクの近くまで行ってアザ ンを いたり人々が入り出するのを眺めていました。彼らはそこに立って周りの 世界に 着に会 にいそしんでいましたが、彼らがそこに入る前と では明らかに 子が なり

ました。私はそこに惹き付けられましたが、同 にそれを拒否しました。こちらの道からあちらの道への は、渡り切るには幅が すぎ、それをどうやればいいのか 当もつきませんでした。そして私は物思いに耽りました。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/2258>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。